

2024

FREE

南阿蘇村 地域おこし協力隊

# ヒトコト録



南阿蘇村の  
その先へ。

藤岡 政人  
大内 健一  
桑原 孝広  
市村 由菜  
田上 菜菜  
槌田 晴菜  
家入 明日美  
豊留 静香  
宮脇 悠香  
吉田 千芳子  
吉田 洋樹  
赤星 静香  
ヴァイルヘルム ヨハネス  
梅田 ゆうか  
江藤 俊希  
黒崎 以朗  
大塚 史也  
御木 徳大  
御野 雅人  
板野 知沙  
盛山 裕史  
阿南 望史  
中山 恒治  
中田 恒幸  
中田 朋宗

プロジェクト、  
自分ごと、暮らしごと。  
自分が自分でいられること。  
知らなかったことを知ること。  
地域と向き合うこと。  
誰かを笑顔にすること。  
自分のことも、暮らしも  
仕事もたいせつに  
地域おこし協力隊として  
南阿蘇村の「その先」を  
皆さんといっしょに描きたい。



南阿蘇村  
地域おこし協力隊

【活動中のプロジェクト】

有機農業推進プロジェクト

「風景をつくるごはん」をテーマに、有機農業について学び、推進する。

新規就農プロジェクト

農業の現場を学びながら、任期後の新規就農を目指す。

ジビエ活用による有害鳥獣対策プロジェクト

狩猟、解体等の技術を習得し、ジビエ活用の視点から鳥獣害対策に向き合う。

移住・定住促進プロジェクト

空き家・空き地活用の啓発、移住・定住促進等に取り組む。

地域経営組織推進プロジェクト

観光情報発信、イベント企画運営等を通じて、村の活性化に寄与する。

南阿蘇鉄道復興支援プロジェクト

熊本地震の被害を受けた南阿蘇鉄道の保線、駅や列車での車掌等の業務。

多文化共生推進プロジェクト

地域日本語教室の運営と、在住外国人が住みやすい村づくりに取り組む。

# CONTENTS

p.03 はじめに

p.04 2023年度卒業隊員紹介

p.06 2、3年目の正直。

p.08 新入隊員のはなし

p.20 地域おこし協力隊ってどんな制度？

## 【はじめに】

こんにちは。南阿蘇村地域おこし協力隊です。

地域おこし協力隊とは、地域課題の解決に向けた、総務省の外部人材活用制度。

2024年2月現在、南阿蘇村では7プロジェクト20名が活動しています。

皆さんという地域の“主役”を支え、一緒に考えながら、

南阿蘇の“その先”の景色を共に見据えることが、わたしたちの仕事です。

任期を終えて次のステップへ踏み出した隊員。

1〜2年目の経験を活かして活動を展開する隊員。

まだまだ手探り状態の新人隊員。

それぞれの奮闘ぶりをお届けします。

応援してくださる地域の皆様へ、心からの感謝を添えて。

2024年3月 南阿蘇村地域おこし協力隊一同

南阿蘇村  
地域おこし  
協力隊

# 2023年度 卒業隊員紹介 Graduation Members

project  
シルバー人材開拓(健康推進課)  
2023年10月退任  
赤星 静香さん



これからも南阿蘇で  
福祉の道を歩みます

久木野福祉センター内シルバー人材センター事務局で、会員サポート業務を担当させていただきました。会員さんとお話ししたり、現場に行ったり、一緒に過ごした時間は私にとってかけがえないものです。地域おこし協力隊として村内を駆け回り、地域の方々と触れ合うことができました。

今後は介護福祉士として引き続き南阿蘇村の福祉に携わります。目標は、南阿蘇で自宅を建て、趣味のおうちキャンプを楽しむこと！南阿蘇の四季を感じながら過ごしていきます。



上/趣味のキャンプでリフレッシュ。南阿蘇はキャンパーにとって最高の環境です！  
下/自宅付近から見える、夕景の阿蘇五岳。南阿蘇で一番好きな景色。

project

黒川区創造的復興(政策企画課)

市村 孝広さん

2023年6月退任



## 世界で一番好きな場所で、ご縁を大切に歩む



右/KIOKUにて。外国のお客様の来訪も多いです。  
左/羊は11頭に増えました！関心のある方、お気軽にお声がけください。

南阿蘇めえめの会 Instagram:@minamiaso.sheep.association

黒川地区の震災復興・活性化サポート、旧長陽西部小学校での震災ガイド活動に携わりました。わたしは地震を経験しておらず、ガイドをするのも初めてで、いろいろと悩んだこともありましたが、すべて大切な経験です。培ったスキルを活かし、現在は熊本地震震災ミュージアムKIOKUに勤務しています。来館者に「来てよかった」と言われるのが一番うれしいです。また、村の耕作放棄地を活用して羊の事業を立ち上げました。飼育体験会やふれあいイベントも行っています！

project

地域経営組織推進(産業観光課)

大内 佑介さん

2023年11月退任



南阿蘇の観光を支える  
ひとりとして精進！

主な業務は、観光案内、観光商品等の立案やパンフレット作成。特に、かき氷文化を盛り上げようと4年にわたって開催した「南阿蘇のやさしい氷プロジェクト」では、毎年よりよい内容にしようとして、事業者さんと意見を交わしました。初めは観光に関する知識はほぼゼロの状態。かなり大変でしたが、南阿蘇を知っていくうちにたくさんの方に出会い、自分の居場所を得ることができました。退任後も、みなみあそ観光局で、やりがいのある充実した観光業務に携わっています！



上/かき氷プロジェクトではガチャガチャを導入し、楽しんでいただけたよう工夫しました。  
下/南阿蘇は満天の星が堪能できる、とても贅沢な村だと思います。

人も自然も大好き。  
出会えた皆様に感謝



project

地域経営組織推進(産業観光課)

桑原 健一さん  
2023年11月退任

観光案内やイベント運営、SNS更新、飲食店の情報マップ作成など、観光分野で活動しました。また、前職でイタリアンの料理人をしてきたため、協力隊活動中も村内の飲食店にてピザ作り体験イベントを開催し、食を通じた交流を楽しみました。たくさんの人と出会い、つながれたことがなによりうれしかったです。  
将来の展望は、自分のイタリアンの店を持つこと！自然が豊かな南阿蘇村で目標に向かって着実に歩んでいきます。



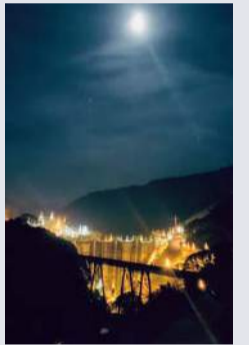
上ノ厨房で食材と向き合っている時間がなによりも楽しいです。  
下ノパスタピザはお任せあれ！

## 復興に向き合った4年間。 人生は笑顔&全力で

熊本地震で被災した南阿蘇鉄道の復興に携わり、主に駅舎などの施設管理、列車が安全に走行するための線路などの設備点検や維持管理、施工業者さんの安全管理を行いました。JR肥後大津駅への乗り入れ計画の実現に向けた動きなど、苦勞することもありましたが、なによりも、南阿蘇鉄道の社員全員で全線運転再開を成し遂げた事に一番喜びを感じました。  
南阿蘇は人が温かく、水がおいしいところ。これからも、家族を一番に大切に想い、笑って生きていきます！



右/立野ダムの夜景。幻想的な雰囲気が素敵でした。  
左/大阪から家族と移住。世界一大切な存在です。



project

南阿蘇鉄道復興支援(産業観光課)

藤岡 政人さん  
2023年10月退任



project

新規就農(農政課)

吉田 洋樹さん・千芳子さん  
2024年3月退任

## 農家としてふたり、 叶えたい夢に向かって

新規就農を目指し、南阿蘇村農業みらい公社で研修しました。主に担当した作物は、さつまいも、かぼちゃ、里芋、白ネギなどの土地利用型作物。大切に育てた農作物を初出荷した際「農産物の状態は良い感じ」と、ベテランの御先から言ってもらえたのがうれしく、やりがいを感じました。

楽しいことばかりではない農作業。特に1万2千株ほど植え付けた、さつまいものツルを反す作業では、その大変さを痛感しました。  
独立したいま、自分たちの生産で、いかに生活していくかが課題。農業は先行投資が多いので、土づくりから出荷まで計算して生業をつくり上げていきます。もちろん、いいものを作ることを第一に、向き合っていきたいです。

今後は、生産に加えて加工品や自社ブランドを作っていきます。土地利用型作物栽培を通じた耕作放棄地の解消と、自家製の小麦やそば粉を使ったパン屋を開業するのが夢です。

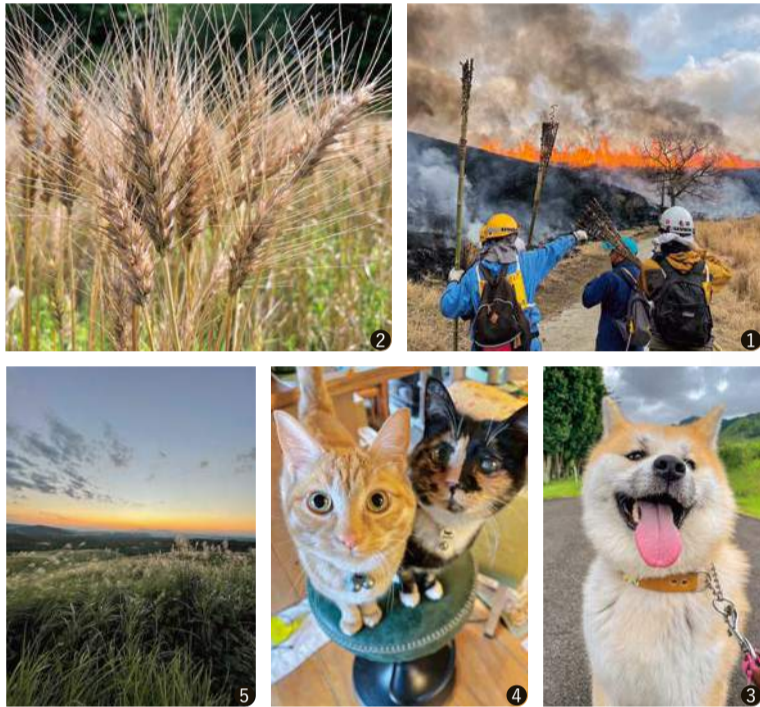


上/さつまいも収穫機「ポテカルゴ」を使って作業。農機具のありがたみを感じます。  
下/南阿蘇村地域おこし協力隊へ入隊したことをきっかけに出会い結婚夫婦になりました。

農園 ベルの樹 Instagram:@tree\_of\_bell

# 23年目の正直。

地域おこし協力隊任期は、最長3年。  
着任(移住)したてのころは右も左もわからなかったけれど、  
2~3年目になれば多少なりとも見えてくるものがある…のかも？  
いまの正直な気持ちをインタビュー。



1. 野焼きにて。熱かったです、阿蘇草原の千年の歴史を肌で感じた貴重な時間でした。  
2. 趣味で始めた小麦づくりも今年で3年目。前年との生長の比較ができて楽しいです。  
3・4. 犬と猫と暮らしています。いつも可愛い子たちに囲まれて幸せ。  
5. 秋の、暖かな陽だまりと冬の気配を感じる瞬間がたまらなく好きです。

## 南阿蘇のために 自分ができることを着々と

協力隊3年目の現在は、旧両併小学校にある南阿蘇村農業みらい公社の事務職員として農業関係の事務をしています。そのかわり、農作物を販売するマルシェや農業体験イベントの主催運営など、村の地産地消を推進する活動を行っています。

南阿蘇村の好きなのは、四季折々に感じられる自然の空気。東京にいた時には感じる事がなかった自然の香りに、日々癒やされています。特に、秋の夕暮れ時の空気感がお気に入りです。

協力隊の任期もあと約半年。南阿蘇での経験や生活は、人生における大切な宝物です。残りの任期も、少しでもお役に立てるよう笑顔で全力で駆け抜けます！



## 有機農業推進プロジェクト(農政課)

田上 由菜さん

2021年9月着任

東京都生まれ、東京都育ち。自然あふれる場所が好きで、幼いころの思い出が残る祖父の故郷、南阿蘇村に移住。2022年春には両親も移住し、家族で村の暮らしを満喫中。「田舎のほうが充実していて楽しいです！」  
Instagram: @yuna\_tatea



## 有機農業推進プロジェクト(農政課)

槌田 晴菜さん

2021年11月着任

大阪府堺市出身。中学・高校はバスケットボール部に所属。動物看護師として働き、縁あって南阿蘇村へ。自然が大好きで、移住する以前からアウトドア派。「大阪にいたころはよくキャンプに行っていました」。  
Instagram: @t.haruharu11

## 南阿蘇の美味しいもので 地域の輪をつなぐ

南阿蘇村農業みらい公社にて地産地消を推進するために、南阿蘇の農家さんと、飲食店や宿泊施設をつなげる農産物マッチングアプリ「ジモノミッケ!」の集荷・配送作業をしています。また、農産物のマルシェや農業体験イベントの開催や有作くん(熊本型特別栽培農産物)の申請サポートも業務のひとつです。

南阿蘇の好きなのは、自然が豊かなところ。四季折々の美しい風景が広がり、心を癒やしてくれます。

今後の目標として、まずは集荷配送システムの確立と公社業務の収益化を目指しています。そして個人としては、家庭菜園や自分が食べる用の米づくり、羊の出荷仕事にも挑戦していきたいです！



1. 産婦人科へ米を配送。いつも笑顔でお届け！  
2. チェンソー講習を受けた後に、チェンソーカービングクラブに参加しました。  
3. 学校給食の食材を配送。生徒の皆さんに地元のおいしい物を食べてもらいたいです。  
4. めえめえの会(協力隊OBが発起人、P04)で羊を飼育。新たな観光資源化、耕作放棄地の有効活用が目標です。  
5. 趣味はツーリングです。こちらは移住してから購入したバイク。

# あこれこれこれこれこれ Our honest feelings



## 新規就農プロジェクト(農政課)

とよ どの  
**豊留 静香さん**

2022年3月着任

熊本県合志市出身。東京でアパレル業や飲食業に従事した後、農の道へ進むべく地域おこし協力隊に。公社で試験的に有機栽培したイチゴを、道の駅などで「MUMUMU ICHIGO」として販売。人を喜ばせること、おいしいご飯、猫が好き。Instagram: @ashtau\_oshizu

## 憧れの場所で 好きなことができる幸せ

現在は南阿蘇村農業みらい公社で作物を栽培・管理しながら2024年9月の新規就農に向けて準備を進めているところです。屋号は「南阿蘇 山ノ苺研究所」。南阿蘇の景観を、農業を通して守る! その方法を研究し続ける為に、この屋号にしました。

朝でも夜でも晴れでも雨でも、飽きない景色が広がっている南阿蘇。どんな天候でも、その瞬間瞬間がこの地域のおきの魅力になっています。そんな素敵な場所で好きなことをしながら生活できるなんて、幸せ以外の何物でもありません。南阿蘇のポテンシャルを最大限に活かしながら、まずは有機栽培のイチゴと里芋をマスターしたいと思います!



1. みらい公社で共に働く素敵な仲間たち。
2. 自然豊かな南阿蘇。どこを切り取っても壮大な景色が広がります。
3. 一緒に暮らす大切な家族、猫のピピとマル。日々癒やされています。
- 4-5. 農業公社で育てている、イチゴとニンニク。



## 次世代へ誇れるものを 残したい

2年目に入り、有機農業への理解を深めてもらう活動や農業体験イベントを開催したり、食品加工業者に農家を紹介したり、ボランティアを募って緑農(※)につながったりと、多くの機会をいただきました。心より感謝しています。生産者と消費者などが直接つながる場の大切さを実感する日々です。わたし自身の経験をふまえながら、食と農を身近に感じられるような活動を心がけています。

古くから継がれてきた美しい地で、おいしいお米を作り続けられるように頑張ります! 次世代の子どもたちに、誇れるものを残していけるように。

※農業に関心のある人と手助けを必要としている農家との「緑づくり」を行う取り組み。

1. 素足で田んぼに入って田植え。大変だけどとても気持ちがいいです!
2. 企画した農業体験イベントにて。農業の先輩たちのお話はとても勉強になります。
3. 稲刈りに挑戦。コンバインの操作も教わりました。
- 4-5. 刈った稲はかけ干しに。天日と風で、じっくり乾燥。



## 新規就農プロジェクト(農政課)

**宮脇 悠さん**

2022年3月着任

熊本県熊本市出身。建設業に15年勤務した後、食の大切さに気づき、農業の道へ。稲作を中心とした農家を目指している。2025年就農予定。趣味はイラストとスパイス料理。村のおすすめスポットは塩井社水源。Instagram: @be\_seed\_

## 南阿蘇の暮らしにまつわる 生きた情報を発信

移住定住や空き家にまつわる情報発信が業務のメインで、いろいろな地域の方を取材してまわっています。

暮らしと自然が近いところが、南阿蘇の魅力。「生きている実感」みたいなものが得られます。地域行事がいろいろ残っているところも素敵。地域の人たちが大切につないできた文化がそここに垣間見えます。

それらの魅力をふまえて協力隊活動の集大成として作っているのが、村の暮らしにまつわることをまとめた冊子。正しい情報、というよりも地域の方が話してくださった「生きている情報」を、移住を検討されている方へ伝えたい。観光から一歩踏み込んだ魅力に触れるきっかけになればいいな。



## 移住・定住促進プロジェクト(定住促進課)

**家入 明日美さん**

2022年1月着任

熊本県熊本市出身。大学進学で北海道帯広市へ。雑誌編集の仕事を経て、17年ぶりに熊本へ。南阿蘇村が、「ただいま」を言える場所になればいいなと思いつつ、業務を通してふるさとの学び直し中。Instagram: @dandelion\_seeds1124



1. 編集・ライティングスキルを活かして制作したパンフレットや冊子。家や土地活用の後押しに。
- 2-3. 地域の方とふれ合う場として、交流会を企画。集落内の歴史散歩(2)と梅仕事体験(3)。いずれも村内の方が講師役です。
4. 憧れの和太鼓を始めました。地元のチーム「和楽集団 昂」で活動中。村内でもいろいろ、演奏させていただいています。
5. 北海道にて乗馬体験。目標は熊本と北海道の二拠点生活です!

# 自分軸で探す、 「ちようどいい」暮らし



File.01

定住促進課

梅田 ゆうかさん

【移住・定住促進プロジェクト】

福岡県福岡市出身。2023年2月着任。老後の楽しみの予定が、だいぶ前倒しの移住に。いずれは家族で南阿蘇に定住するのが夢。子育て経験を活かし、移住関連イベントなどを企画している。

## 南阿蘇に住みたい

移住はタイミングとはよく言ったもので、チャンスはふいに訪れる。梅田ゆうかさんの場合、仕事や家族の状況が整ったのが、この時だった。

「景色がきれいで、水も食べ物もおいしい。あつ、温泉も！人との距離感も、観光や暮らしの規模感も、『ちようどいい』」と、目をキラキラさせて村の素敵など話を話してくれる梅田さん。以前携わった仕事の環境で、熊本県や南阿蘇村の人たちとやり取りする機会があり、その人柄を含めていっそう魅力的に思えたと振り返る。

子育てが落ち着き、本格的に移住を考え出したころ、訪ねたのは村内のとある宿。宿主もまた移住者で、梅田さんの移住相談に親身に乘ってくれたそう。宿主のすすめで役場に立ち寄ってみたところ、ちようど地域おこし協力隊の募集が始まるタイミングと言うではないか。「まずは住んでみて、地域を知ろう。退任後のことは動きながら考えよう」と、目の前のチャンスをつかみに行った。

## 自分軸でモノゴトを捉える

家族を残しての単身赴任。最も変化を感じているのは、「自分」を意識するようになったことだという。「お母さんの『じゃなくて、私の』好きな景色、仕事、友達…。自分が自分として、関わりたいという気持ちが強くなった」。

家族に置いていた軸を、少しだけ自分に引き戻したことで、「私の世界が広がっていく感覚が、とっても楽しいんです。梅収穫や農家さんバイト、南鉄復興イベントにかき氷を出店するなど、初めての体験ばかり」。

仕事も暮らしも、いいことばかりとはいかないのがリアル移住ライフ。それでも、「自分が楽しんでる姿を家族に見せたい」。好きな場所が、また少し増えたそう。



パン屋さん巡りを楽しんでますよ

## 誰かのために、できること

現在の仕事は、空き家・空き地バンクの窓口対応や移住促進イベントの企画など。専門知識や地域のことをイチから学びつつの業務とあって、頭はいつもパンパンだ。でも、「関わりを重ねるほど、より向き合ってもらえる。誰かの役に立ててくれるという実感が、やりがいにつながっています。地域住人のひとりとして迎え入れてもらえることが、何よりうれしい」。

真摯な姿勢でコツコツと。自分なりの「ちようどいい」を模索中の梅田さんだ。



上. 事務職経験が豊富な梅田さん。役場の窓口対応や事務処理の正確さは、さすがのひと言。

- 1・2. 初めて企画した、子育て移住体験ツアー。保育園や小学校の見学、給食体験や先輩移住者ママとの座談会などを行った。参加者からは「やさしい人ばかりで感動！すぐにでも移住したい!」という声。
3. 沢津野区の夏祭りをサポート。地域の方と交流できる貴重な機会。





## File.02

### 定住促進課

# の 耘野 雅人さん

【移住・定住促進プロジェクト】

熊本県長洲町出身。2023年4月着任。総合化学メーカーの研究部門に勤めた後、コーヒー事業で起業すべく退職し、南阿蘇村へ。「阿蘇のイメージは付加価値になる。地域のことをもっと知りたいです」。  
Instagram: @kumamotocoffeeoster

出会いのなかで育んだ、  
起業への思い

人生において大切なことはさまざまあるけれど、なかでも「誰と出会うか」が与える影響は大きい。その点、耘野雅人さんは恵まれていたと言えるだろう。

中学生のころに釣りを始めたときには、ベテランの釣り人に弟子入り。毎週のように九州の川で釣りに没頭した。合間に師匠が淹れてくれたコーヒーに、後々どっぷりハマることになる。後とは、本人も予想だにしないことだった。

就職を機に広島・山口県に移住。化学系の実験職だったこともあり、コーヒーの焙煎や抽出の過程に改めて興味を持つ。趣味と実益を兼ねた「実験」を重ねるうちに、地域で名の知れた店のマスターと知り合って、コーヒーのいろはを教わることに。「いつも叱られてました(笑)。でもとっても面倒見のいい方で」。常連客との交流から得られるものも多かったと話す。「豆の個性や、焙煎する人の考え方やクセ、さまざまな要

素が絡み合う」。その奥深さに魅せられて、いつしか「コーヒーで誰かを笑顔にしたい」と思うようになる。

### 地域の輪の一員に

地域おこし協力隊になったのは、総務省の制度として起業を後押ししてくれる側面があったから。加えて、「地域になじむステップを踏めるかも」と考え

てのこと。さりとて、未経験の仕事や学びつつ起業準備を進めるのは、想像以上に難しい。着任してみて、しみじみ実感しているという。そんな葛藤を抱える耘野さんだが、少しずつ、業務にやりがいを感じられるようになったそう。

耘野さんは協力隊業務の一環で、沢津野区の有志団体「早角会」の活動をサポートしている。「深く地域に入り込んで、い

ろんな話ができるのがうれしい。皆さんの前向きな姿勢に感化されて、自分も皆さんのために何かしたいなって自然に思えるんです」。

ひとまず、一歩前進と言ったところか。最長3年の協力隊任期。長くはないが、決して短くもない。この期間をどう活用し、どう過ごすか。地域おこし協力隊制度の難しさであり、醍醐味でもある。



地元長洲町に焙煎所をOPEN!



## 難しいこともあるけれど、 地域に関わる楽しさがあるから頑張れる

南阿蘇村で  
店を持つことが目標です



1. 早角会のしめ縄づくりに参加。会のメンバーに教わりながら、業を纏うという初めての経験。完成したしめ縄は、集落の神社に奉納した。
- 2・3. 早角会が主催した夏祭りでゲームコーナーを担当。



# 新たななる挑戦。

# ワイルドに、カッコよく！



File.03

農政課

あなんのぞみ

阿南 望さん

【ジビエ活用による有害鳥獣対策プロジェクト】

熊本県高森町出身。2023年6月着任。南阿蘇での暮らしは、ふるさと(阿蘇地域)を再発見する機会にもなっている。ハンター、料理人に加え、ドローン操縦や動画編集など複合的なビジネスを展開予定。Instagram: @cutting\_man9

## 『職人』として

世の大人は、「子どもたちには夢を持っていきいきと歩んでほしい」と願っていたりする。では、子どもが憧れるカッコいい大人とは？

「自分にとってのそれは両親だった」と、阿南望さん。節約めだった手で大工道具を握る父の背中。冷蔵庫のありあわせ食材を使って、魔法のように料理を拵(もも)てしまう母。「行動で示せるってカッコいい。何かを追求して、没頭している大人。言うなれば、職人かな」。

この職人という在りようを、阿南さんはジビエをテーマに据えた協力隊活動にも見出しているようだ。「自分は料理人として三次産業に携わってきた。ジビエは、一次(狩猟)から六次(加工)までのすべてに関わる。獣としての生態、さばき方、森の生態系、阿蘇という地形や狩猟の歴史まで。ひとつ知れば、もつと知りたくなる」。



上、「獲物を狙っている風で(笑)」。撮影のため、茶目つけたっぷりに茂みの中に潜んでくれた阿南さん。  
1. 同じプロジェクトの盛山さんと。軽妙なやりとりが楽しい2人。  
2. 有害駆除されたシカやイノシシの尻尾は、役場に届けられる。数を数えるのも仕事のうち。  
※写真に写っているのはケースのみ。銃は入っていません。

## 父の挑戦を、子どもたちに見せたい

長年心血を注いだこれまでの仕事を離れ、南阿蘇へ、地域おこし協力隊として移住する。その選択をするか否か、阿南さんは相当悩んだらしい。「けれど、決めた。いそがしきにかまけて守りに入っていた自分を脱却しよう、いっばい恥をかいて新しいことを学んでみようって。そういう姿を、子どもたちに見せたいな」。

阿南さんの本気に、妻も力強く背中を押してくれた。いまでは、3人の子どもたちも一緒に、登山や虫捕りをして楽しむ時間が増えたという。



妻と2男1女の五人家族。家族みんな料理大好き!

## 誰かの欲びに寄り添う仕事

阿南さんの仕事のスタンスはとても明快。「誰かに笑ってもらえることが、自分のエネルギーになる」。仕事内容としては料理から少し距離を置いても、その軸が変わることはない。

協力隊活動における目標のひとつは、ジビエの解体処理施設の完成。「たとえばその横にBBQ施設を作って、食育を考える場にするのもいいかも」と、その先の展望を語る。「まずは自分が、命をいただくという行為を身近なものにしよう」と、狩猟免許を取得したところだ。「自分がどこまでできるか、正直なところ未知数です。でも、ワクワクしてる。人生、ワイルドにいきたい」。そう言って、大人も憧れずにはいられない。



色鮮やかなボタン(猪)肉。

千葉県市川市出身。2023年5月着任。妻と生まれたばかりの長男と共に、南阿蘇へ。「いまはインプットが多い時期。そろそろアウトプットしたいな」。いずれは自身の店を持ち、食材のひとつとしてジビエを活用したいと考えている。

## 料理のおもしろさにはまる

「料理の魅力は、食べた人みんなが笑顔になれること！」そう話してくれた盛山裕史さんの転機は、学生時代。飲食店でのアルバイトが楽しいあまり、なんと大学を中退してスタッフになった。そのうち、勉強を兼ねて店のまかないを作るようになる。「先輩に褒めてもらえるのがうれしくて、もっとうまくなりたいて欲が出てきた」。

それまで本格的に料理を学んだことのなかった盛山さんは「料理の芯」とも言うべき基礎を学びに単身イタリアへ。寝る場所と食事の提供を条件に、数軒のレストランの厨房で働いた。ほとんど武者修業だ。

帰国してからは東京の飲食店に勤務。その後、妻と2人で福岡へ移住する。

## 目指すは料理人ハンター

福岡の飲食店で働いていた盛山さんの元に、あるとき、捕獲された野生のシカが届いた。すでに息を引き取っていたが、まだ温かい。「ブワーってアドレナ



リンが出てきて。ああ、「ここから」なんだって実感したという。自分が料理できるのは、誰かが野菜を作ったり、動物にとどめを刺したりしてくれているからだよなって…。

「躊躇したらダメだ。それはシカに失礼だ」。自らの手で黙々とシカをさばきながら、明確な言葉にできないものを、盛山さんは感じ取っていた。そんなときに目にした、ジビエがテーマの

地域おこし協力隊募集の情報。「これだ！」盛山さんの目指す方向が、「ハンターでもある料理人」と集約されていった。

初めて触れる知識を飲み込み、地域の鳥獣被害の現状を確認し、猟友会のベテラン陣の話をとにかく聞くことから始まった仕事。晴れて狩猟免許を取得してからは、仕掛けた罠の見回りやかかった鳥獣の捕殺も少しずつ行っている。

これまでの仕事とはかなりのギャップがあるものの、「なんでもおもしろがれる」盛山さんのこと、日々の新発見を楽しんでいる様子。「料理に軸を置くことは変わりません。狩猟免許を取ったことで、地域のために具体的にできることが増えたのは一歩前進」。

いのちと正面から向き合う。そう覚悟を決めた料理人の挑戦は、始まったばかり。



カルデラの中に住んで、なんだかすごい！

## ハンター×料理人。

## 自分なりの、いのちとの向き合い方



イタリアンが得意です。

1. 箱罠に入って作業中。動物の生態をふまえて設置場所を考えるのも、なかなか難しい。
2. 球磨村にて研修。イノシシの解体を学ぶ。
3. 林床に仕掛けた、括り罠。



# 楢円だえんに生きる

## クリエイティブな農に携わりながら、



File.05

農政課

中山 勇治さん

【新規就農プロジェクト】

茨城県境町出身。2023年7月着任。前職での繊維植物の研究が、農への入り口。取引工場が佐賀県にあったことで、九州と縁を持つ。協力隊期間は「やりたいことと現実の折り合いを探る時間」。

ものづくりに魅せられて

「洋服を作っていました」。泥だらけのシャツに汗をにじませ、メガネの奥の瞳をキュッと細めて、中山勇治さんは穏やかに振り返る。

ものづくり好きは、父の影響。ファッションへの関心から服飾の仕事を目指した。「服のことしか考えられないくらい、没頭していました。こうしたい、を自分の手で形にできるところに、自己表現の楽しさがあったのかも」。

そんな中山さんが農に直接携わるきっかけのひとつは、結婚式を挙げたときのこと。「よくも悪くも、そこには自分の人生の縮図があった」。自らの足跡を残せる仕事とはなんだろう？ 生き方を見つめ直すなか、辿り着いたのが農業だ。

店で購入した野菜を食べて、おいしいと思った生産者のもとを訪ね歩き、学びを深めていった中山さん。あるとき自然栽培の野菜を口にして、「感動しました！ 味がしっかりしてて、おいしい」。食べ物を通して環境のことに加え、農業を通して環境のことに加え、という感覚



毎日違うメガネをします

も新鮮だったと話す。

「服は自分でコントロールできるけれど、農業は違う。お日様と土と水、そこに人の知恵が加わって成り立つもの。農業って、究極のクリエイティブなんじゃないか？ って」。

見えないものを、  
見えないなりに

中山さんには座右の銘がある。それは「楢円に生きる」ということ。

たとえば、慣行栽培と有機栽培。都市暮らしと田舎暮らし。相反する価値観を前にしたとき、一方が正しく他方は誤りと判断してしまいがちだ。けれど実際は、それぞれによしあしがある。「ひとつの正しさを求めない。矛盾する価値観の間を行ったり来たり思考を巡らせることで、それぞれの良さを活

かしながら就農や定住という目標に向き合うヒントを得られるのかもな、と」。

価値観を点として考えてみよう。矛盾する点のいずれか一方を選ぶなら、その周囲に描かれるのは真円だ。そうではなく、もう一方の点も丸ごと包んでしまおうというのが、中山さん流。2つの点が近づいたり遠ざかったりする（思考を行ったり来たりさせる）ことで描かれるのは、不規則に伸び縮みする楢円ということになる。

緩やかな円のなかでさまざまに思考を巡らせつつ、確たる結論を出さない。見えないものを、見えないなりに。ありのままに受け止めて、自らの内でおらかな生き方は、とてもやさしいものに思えた。



読書趣味



1



2



3



5

1. 協力隊業務で水田除草中。外輪山を眺めながら。
2. 初めて作った米で土鍋ごはん。
3. 研修先で収穫したラディッシュ。「野菜の扱い方を学んでいます」。
4. 村内をフラットドライブして出合った絶景。
5. 五ヶ瀬町の茶畑へ。村外でも積極的に活動。

File.06

農政課  
ともろを

黒崎 以朗さん

【新規就農プロジェクト】

東京都八王子市出身。2023年3月着任。有機農業の考え方のひとつ、BLOF(プロフ)理論に興味あり。「茅とか竹とか、地域で余っている素材を肥料として活用できないか考えてみたい」と話してくれた。

運ぶ人からつくる人へ

地域おこし協力隊制度が、未知の世界へ飛び込む後押しになることがある。黒崎以朗さんの場合がそう。東京から熊本県南阿蘇村へ。縁もゆかりもない土地へ来たのは、農業を学ぶためだ。「東京のふるさと回帰支援センターに農業がやりたいと相談したんです。熊本は水がいいし、農業が盛んだと聞いて。情報収集するうちに、南阿蘇の新規就農プロジェクトのことを知りました」。

前職では、青果物の配送業務に従事していた黒崎さん。次第に、消費者のもとへ運んでいた青果物そのものへ興味を抱くようになっていった。「食へのこだわりが強いお客さんが多かった印象ですね。会社では、野菜の販促知識を身につけるために、生産者の話を聞く機会もそれなりにあって。野菜が育つ背景に、すごく感動しました」。

農業、ありだな。黒崎さんのなかで育っていった気持ちがついに動いたのは、コロナ禍のこと。「お客さんに対面で『ありがとう』って言ってもらえるのが、



やりがいがだった。それができなくなると……。これをチャンスと一念発起。運ぶ人から、つくる人になるべく、舵を切った。

誰かの「おいしい」を聞きたい

「熊本といえば、トマト」。仕事柄、商品として扱ったこともきつと多かっただろう。トマトを、独立後の栽培品目と考えている黒崎さん。研修を通して、

「つきつきり様子を見ないといけないから、栽培が難しい。けれど、そこがおもしろい」と手応えを感じている様子。

「おいしい」を聞きたい

「お客さんのこだわり」について「お客さんのことか」と納得できるようになったとも話す。「作り方次第で、味も栄養価も収量も変わってくる」。品質、規模感、収入。自分がどのライン

を目指すのかは、判断が難しいところだ。学んでは考え、実践しては考え。

「せつかく農家になるのなら、『おいしい』って言ってもらえる農家になりたい。地域の人にこそ選んでもらえるおいしいトマトを作ることが、当面の目標だ。いずれは、観光農園としての展開や海外輸出も視野に入れている。

でも、これだけは決めている。「せつかく農家になるのなら、『おいしい』って言ってもらえる農家になりたい。地域の人にこそ選んでもらえるおいしいトマトを作ることが、当面の目標だ。いずれは、観光農園としての展開や海外輸出も視野に入れている。



自宅の近くに水源!

## 自分で考えて決めて、手を動かすことにこだわりたい

景色がきれいでいいな



- 上. 南阿蘇ワイン「RED cow」の原料となる、ワイン用ブドウの収穫作業。
1. 機械の操作方法を学ぶ黒崎さん。
  2. 協力隊仲間の、さつまいもの試験栽培をサポート。
  3. 研修先のトマト農家にて。「管理が難しいぶん、飽きないです」。



# 農業という生き方。

## 一歩踏み込んだ、つながりを



File.07

農政課

御木 徳大さん

【新規就農プロジェクト】

大阪府富田林市出身。2023年4月着任。前職で熊本に住んだ際に、「野菜の味が全然違う！ものすごくおいしい！」と感動したことが、熊本移住のきっかけ。大学では美術系で学び、いまでも絵を描くのが好き。Instagram: @tokuhiromiki

### 人とつながる生き方を

人が夢を語るとき、たいいては「何になりたいか」「何をしたいか」ということが論点になる。けれど御木徳大さんにとって、農家になることは、自らのあり方を表現するツールのひとつであるようだ。「農業は、人と人が一歩踏み込んだつながりを育める仕事なんじゃないかって思ったんです」。

御木さんのなかに農業という選択肢の芽が育ち始めたのは、結婚して子どもを授かったころ。家族で小さな農園を持たたら楽しいだろうな…という漠然とした憧れは、「つながりを大事にしたい」という価値観と結びつくことで昇華されることになる。

とはいえ、まったく畑違いの分野へ飛び込むリスクを無視するわけにはいかない。初期投資の大きい農業、家族がいればなおさら、考えるべき要素は多いだろう。「覚悟を決めても、やっぱり怖かった」のは、当然のことだ。御木さんの背中を押ししたのは、地域おこし協力隊の制度。給与を受け取りながら学べ



農家さんに、家族ぐるみでお世話になっています



ることはもちろん、隊員として地域課題に携わることができるといった点も、御木さんにぴったりはまった。

### 南阿蘇での暮らしとこれから

御木さんは、前職の転勤で熊本市に住んだ経験がある。当時から阿蘇にもよく遊びに来ていて、山並みの美しさに惹かれていたそう。地元関西では高野山信仰が盛んなこともあり、祈りという視点からも阿蘇の山々へ親近感を抱いたという。

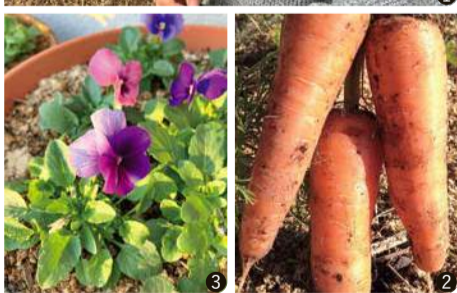
移住に際しては折よく一軒家を賃貸し、家族で家庭菜園

を楽しんでいる。「トマト嫌いの上の子(3歳)がトマト大好きになったんです。下の子(1歳)は離乳食代わりに野菜を丸かじりしています」。日々の研修で学んだ土づくりを家庭菜園でも実践中。畑作業をしていると近所の人が声をかけてくれるのがうれしい。まさに、「畑がつながる人の縁」だ。

実際に農業の現場に立つてみて、見えてきた課題もある。「農家の職域がとんでもなく広い。野菜に詳しいのはもちろん、機械、大工、経理、営業、人材育成…。百姓ってこういうことか、と」。思い描く「人が集う農業」実現への道は容易いものではないだろう。けれど、「どうありたいか」を自らに問い続ける御木さんのことだ。その道のりさえ、とことん真剣に、にっこり笑って、歩いていくのだろう。



会(P.04)で羊と景色が堪能



上. 野菜の多品目栽培を目指す御木さんが、米農家の後継者不足の現状を知り、継承についても考えるようになったそう。

1. 村の特産品、そばの収穫オペレーター業務。
2. BLOF理論、炭素循環農法、自然栽培手法を組み合わせつつアレンジして育てたニンジン。その味に、家族も大満足だったようだ。
3. 自家製たい肥で土づくりの勉強中。パンジーがきれいに咲いた。

熊本県西原村出身。2023年3月着任。栽培品目はイチゴとトマト。イチゴは「甥っ子の大好き」だとか。勉強中の有機農業についても、「難しいけれどやりがいがありそう」と話す。

Instagram:@f19\_u\_w

### 逆境に燃えるタイプ

真っ黒に日焼けした爽やかな笑顔が印象的な大塚史也さん。イメージ変わらず、かつてはスポーツ少年だったらしい。とくに打ち込んだのは野球。高校を卒業して就職するまで、白球を追いかける青春を送った。

大塚さんは、「難しいことにこそ挑戦したくなるタイプかも」と自己分析する。野球はもとより、受験にしろ、就職活動にしろ、「難しいんじゃないか」という周囲のやりわりとした制止などなんのその。「やると決めたからには、やる」。自分で決めて、一つひとつ行動と結果を積み重ねてきた。20代半ばで、こんな地道な努力ができる胆力を備えているなんて、驚くべきことだ。

### 農業と大切な思い出

そんな大塚さんが次なる挑戦相手とするのは、農業。大手電子機器企業の製造部門から、まったく異なる分野への転換ということになる。いくつかの要因が重なった転職ではある



が、もっとも大きな要因は大切な思い出にある。

聞けば、大塚さんはほんの幼いころから農に親しんで育ったという。なかでも、曾祖父母といつしよに家庭菜園をしたり、お土産にとおいしい野菜を持たせてもらったりしていたことが、「すごく楽しかったな〜って」。

いつしか忘れてしまっていた気持ちを取り戻した大塚さん。農家になるという目標を掲

げ、地域おこし協力隊として進みはじめた。

### 食の「づくり」として

「植物が『動く』様子が、おもしろいです！」と、農業の魅力を語る大塚さん。茎や葉を理想の状態に近づけるために手を入れれば、植物が応えてくれる。そんなところに、奥深さを覚えている。

加えて、こうも話す。「なにが起るかわからない時代。みんな生きていくための環境を、農業を通して構築できないかなって考えるんです…。うまく言えないけど」。

農家になる。その目標へ近づくと、遙か先の「目的」の輪郭が、はっきりしてくるに違いなし。そこに見えてくるものがどんな形をしているのか、とても楽しみに思う。

趣味は魚釣り。  
大物!



## 逆境にこそ挑め!

## 投げ出さずコツコツと



ラーメンが  
好物です

上. イチゴを試験栽培。「花もかわいいですね」。

1. 初めての家庭菜園で収穫したダイコン。
2. 南阿蘇村で畑を借り、チンゲンサイ、カブ、キャベツ、白菜、春菊…など、いろいろ育ててみているそう。
3. 研修先の農家でミニトマトを収穫。



# 可能性に色づく世界。 自分らしい、農業とのかかわり方



File.09  
農政課  
しゅん き  
**江藤 俊希さん**  
【新規就農プロジェクト】  
熊本県熊本市出身。2023年3月着任。「循環をテーマにしたい」と、雑草を土に戻す土づくりを試している。多品目栽培をする予定。  
Instagram: @shunki44

## 家族と自分の役割

江藤俊希さんの両親は、フレンチレストランを経営している。両親は料理を、江藤さんは野菜づくりを。家族の役割分担の一翼を担いたいというのが、食や農業に興味を持ったきっかけだった。

県立農業大学校で農業に関する基礎を身につけた江藤さん。そのまま就農を目指すことも考えたが、さらに2年、地域おこし協力隊として学ぶことを選択する。

というのも、家族の拠点が熊本市内から南阿蘇村へ移ったから。かねてより両親が思い描いていた「農のかたわらにある食」。その実践のために店を移転、家族で移住したのだ。

「自分の役割は、地域とのかかわりをつくること。移住していきなり就農するより、まずは地域おこし協力隊として、地域を学びながら交流を深めることが大切かなって」。

## いろいろな可能性

食や農業関係以外にも、さ

まざまなことに興味を持っている江藤さん。農家になる、というよりは、多業を組み合わせた展開を考えているという。「感性が向かう先」としていくつか挙げてくれたのは、服飾や絵、写真など。

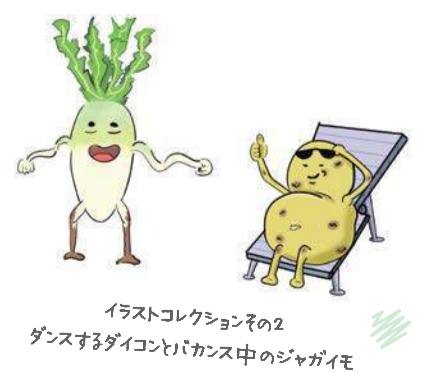
たとえば作物の生長過程や店の料理を写真に撮ったり、野菜をキャラクター化した絵を描いたり。味わいだけでなく、食にまつわる多面的な魅力に気づかせてくれる。とりわけ色彩へのセンサーが強いようで、「西洋野菜のカラフルさが好き」。こうした江藤さんならではの柔軟な視点と発想力は、野菜づく



りを学ぶうえでも遺憾なく発揮されているようだ。

「農業って、やり方も考え方も人それぞれ。正解はないんだよなあ」。ある人はAという手法がいいと言うけれど、別な人はBがいいと言う。それだけ、多種多様な可能性にあふれているということだ。江藤さんは、人の数だけある考え方を否定しない。そのうえで、小さな可能性の一つひとつにそつとスポットライトを当てるのが、とても上手なのだと思う。

そんな江藤さんらしい農へのかかわり方は、私たちがこれまで思いもよらなかった美しく多様な世界を見せてくれるかもしれない。



上. 協力隊で企画した稲刈イベントにて。  
1. 農業みらい公社が管理するワイン用ぶどう園で収穫作業。  
2-3. 両親が営むフランス料理店、ラ・ビネット。店前の畑で西洋野菜の栽培に挑戦中。「管理がうまくいかなくて、パースニップの芽が出なかったのが悔しい」と江藤さん。精進あるのみだ。



File.10

産業観光課

なかむたともひろ  
中牟田 朋宗さん

【南阿蘇鉄道復興支援プロジェクト】

熊本県大津町出身。2023年9月着任。働きながら高校を卒業した経験から、「誰にも強制されないからこそ、自分で自分に発破をかけないと話す姿がたくましい。フィルムカメラが好き。

大事なものを大事にする

ピンときたらやってみる。それが中牟田朋宗さんの人生スタンス。「けっこういろいろやってみたいタイプで」。動物園の飼育係、カメラマン、保育補助員など、携わった仕事は多岐にわたる。もちろん、すべてに真剣に向き合ってきたことは、言うまでもない。

そんな中牟田さんがとりわけ影響を受けたのが、東京でカメラマンをしていたころに出会った人たち。「それまでの人生観がひっくり返りました。いろんな人と会ったけれど、みんな夢ややりたいことがあって、輝いていた。尊敬できる経営者にも出会えた」。

自分にも他人にも、大事なものがあつた。自分が自分でいることが、いちばん。状況を変えないなら、自分が変わる。



それが、中牟田さんの根っこにある思いで、あらゆる原動力になっているようだ。

振り返ったときに  
胸を張れるように

2023年7月、念願の全線運転再開を果たした南阿蘇鉄道(通称、南鉄)。中牟田さんと南鉄との接点は、意外なところにあつた。東京から地元に戻

り、保育補助の仕事に就いていたときに、子どもたちとトロッコ列車(南鉄が運行する観光列車)に乗る機会があつたのだ。「穏やかな時間が流れているというか...なんだかすごく、素敵で。それがこんな身近にあつたなんて。ずっとハイテクなものが好きだったんですけど、意外と自然が好きなのを発見しました」。まさにそのタイミングで見つけたのが、地域おこし協

力隊の募集。「呼ばれてるみたい」に、南阿蘇へ。メインの仕事は、駅員業務と車掌業務。運行案内や売店の売り子、はたまた待ち時間に行けるおいしい飲食店情報の提供まで、「1聞かれたら5返す」をモットーにしている。観光客から、写真撮影を頼まれることもしばしばで、「たくさんの人に笑顔をあげられる仕事」と、やりがいも大きい。

「いつか自分の人生を振り返ったときに胸を張れるよう、頑張ります」。

新しい仕事や環境への戸惑いもあるなかで、自分にできる最善を実践する中牟田さんだ。

すべて自分次第。  
より良い方向へ向かって



いっしょにしゃべーい!

1. 村中が喜びに沸いた2023年7月15日の南阿蘇鉄道全線運転再開を経て、たくさんの観光客がトロッコ列車に乗ってくれている。
2. 運行案内のアナウンスをする中牟田さん。



楽しいと思えるいまを、  
重ねていきたい



File.11

産業観光課

いたくす  
板楠 知沙さん

【地域経営組織推進プロジェクト】

熊本県熊本市出身。2023年7月着任。高校生のころに購入した一眼レフカメラを受用。動画編集の副業をしている。休日には家族が村へ遊びに来たり、天草の海までドライブに行ったり。

思い出の場所で再スタート

東京生活5年を経ても、板楠知沙さんのなかで、南阿蘇村の風景は色あせることはなかった。「小さいころから家族で遊びに来ていた場所。なんとなく、『いいな』っていう印象がずっと残っていました」。

コロナ禍を経て、仕事はほぼ在宅勤務にシフト。「東京にいる意味、ないな」と感じたのが潮時。以前から興味を持っていた地域おこし協力隊として、南阿蘇へ移住することに。父が近隣地域の行政職員ということもあってだろうか。「地域に関わる仕事をしたかったという思いは、どこかにあった」と話す。

観光を通して知る地域

プロジェクト業務は観光。観光案内からイベント企画、事業者対応まで幅広い。「自然豊かで、飲食店や観光スポットがたくさんある。おもしろい事業者さんもいっぱい。楽しい田舎だなって感じます」。旅好きで、地域それぞれの魅力をキャッチするのが得意な板楠さん。人から



阿蘇周辺をいろいろ散歩中！大観峰から見た雲海と、小国町の紅葉



教わったり、自分で見たりして、村の魅力ポイントを勉強中だ。「まだ自信を持って案内はできないんですけど、サイクリングから帰ってきたお客さんに『楽しかった！』と言ってもらえるのがうれしい」。いずれは、板楠さん目線のおすすめ観光ルートを開ける日がくることだろう。

培ったスキルを活かして

板楠さんは、写真や絵が好き。テレビ局のADや記者、動画編集といったクリエイティブ職の経験を持つ。それらのスキルを活かし、観光案内ボードに絵

を描いたり観光客へのインフォメーションポップを制作したりと、活躍中だ。思い入れ深い仕事のひとつとして話してくれたのが、道の駅の敷地内を四季折々の花で彩る企画「Flower Garden in Minamiaso」。フォトスポットを設置して、訪れた人に写真撮影を楽しんでもらおうというもの。板楠さんは、メインの案内看板を制作した。10月。透き通った秋晴れの空の下には、満開のコスモスと夢中で写真を撮る人々の笑顔があった。



新しいフォトスポット誕生！看板も作りました



1. 板楠さんの手描き感がかわいい、観光案内ボード。
2. 受付で観光案内業務中の板楠さん。
3. 道の駅で夜市を開催。垂れ幕づくりと、子ども向けの出店を担当。

教えて  
はっちゃん!

# 多文化共生と 南阿蘇



政策企画課

ヴィルヘルム・ヨハネスさん

【多文化共生推進プロジェクト】

2023年2月着任。ボン大学(ドイツ)で博士号を取得し、各国の大学で教鞭をとる。2015年頃から「阿蘇の社会と自然」のテーマで研究活動を開始。一度村を離れたものの、地域おこし協力隊として再び南阿蘇へ。Facebook: @nihongomaso  
※「大きく載るのは恥ずかしい」とのこと、コラムにて活動を紹介します。

## Q. どんな活動をしているの?

A. 外国籍の人も暮らしやすい、地域に溶け込みやすい環境を、村内に整備する活動だよ。たとえば、南阿蘇村地域日本語教室(みなみあそNIHONGOサークル)の事務や、サポーター(参加者と日本語で交流する地域ボランティア)のコーディネート。資格を取るための日本語教室ではなく、自立した日常生活を送れるようになることを目的としているんだ。遊びの要素を取り入れての慣用句の使い方練習や、日本文化の紹介などを行っているよ。どうすれば多文化共生を実現できるか、当事者との意見交換も大切だね。

## Q. 課題はどんなところ?

A. 実は南阿蘇では、多文化共生に向けたいろいろな活動があるんだ。それをもう少し、holistic(ホリスティック/全体的に捉えること)なアプローチへ移したい。当事者と地域住民との相互理解にもとづく、生活に根づいた多文化共生社会の実現につなげたい。「多文化」とは「差異の承認」を意味する言葉なんだ。「共生」とは共に生きることだね。隣人どうし、互いに助け合って暮らしているこの村でこそ、実現可能だって信じてるよ。

歴史を振り返れば、日本は常に外の要素をうまく取り入れてきた。日本には欧米諸国の政策の成功・失敗から学び、より良い道を切り開くチャンスがあると思う!

## Q. 多文化共生の実現へ向けて

A. 日本には、コトダマって言葉があるね。言葉(コミュニケーション)には魂が宿っているって考え方だ。人と人との交流によって、人間の「間」が蘇る(お互いのテンポが合う)ように、魂もまた、お互いのやりとりのなかに宿るもの。一方通行のコミュニケーションでは、決して生まれないものだと思う。外国人が日本語を学ばばいい、という考え方は、とても一方的だね。双方向に影響し合う関係性があれば、理解が深まっていくと思うんだ。もしかしたら日本はいま、そういう新しい文明開化の時代にきているのかもしれない。みんなと前向きに考えていきたいな。



1. 日本語教室の様子。
2. 南阿蘇村あつまり〜ん祭にて、多文化共生に関する内容を発信しました。
- 3~5. ミャンマーの伝統的なスポーツ、チンロン(日本の蹴鞠に似ている)をきっかけに、地域のサッカー好きな人たちとの楽しい交流が始まりました。
6. 村内には、さまざまな国の方が生活しています。まずはお互いを知ることが、コミュニケーションの第一歩。

## 南阿蘇村 地域おこし協力隊のSNS

隊員がプロジェクトに関する情報等を発信中♪ ぜひフォローしてください。



地域おこし協力隊 Instagram



農業みらい公社 Instagram



みなみあそ観光局 Instagram

### あとがき

まさか第二弾を出せるなんて! これもひとえに、応援して下さる地域の皆様のおかげです。新しいメンバーが加わりつつ、卒隊や、2~3年目を迎える隊員など、相変わらず悩みながら、それぞれの道を模索する私たち。いろいろと未熟さが目立つかもしれませんが、一生懸命さだけは胸を張れます。地域の一員として、これからも応援いただけるとうれしいです。

地域おこし協力隊 家入 明日美

## わたしたちの主な活動場所



南阿蘇村役場

- 移住・定住促進
- ジビエ活用による有害鳥獣対策
- 多文化共生推進



南阿蘇村農業みらい公社

- 有機農業推進
- 新規就農



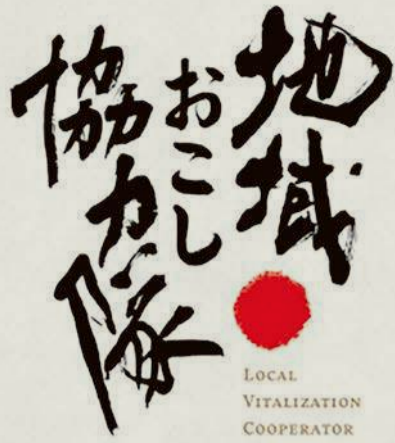
みなみあそ観光局

- 地域経営組織推進



南阿蘇鉄道

- 南阿蘇鉄道復興支援



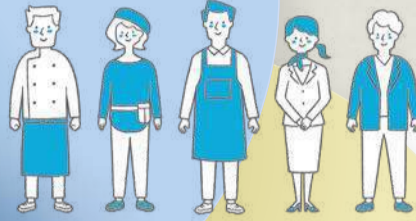
# 地域おこし協力隊って どんな制度？

## 外部人材

(全国の隊員:約6,500名)

- 才能や能力の発揮
- 新しい学び
- 自分らしい生き方の実現
- 地域とのつながり

地域おこし協力隊として  
頑張ります!



## 地方公共団体等

- 柔軟な地域おこし
- 人口増と地域活性化

いい人が地域に  
来てくれたなあ!



## 地域

- 斬新な視点
- 地域活性への刺激

一緒にまちを  
盛り上げよう!



## 任期とその後 (全国)

- ・任期:おおむね1年以上3年未満
- ・活動地定住率:約5割(近隣地含め約6.5割)
- ・任期後の仕事  
起業約4割、就業約4割、就農約1割

## 経費 上限520万円/人・年

- ・報償費と活動費を含む(特別交付税措置)
  - ・隊員への起業継業支援等あり
  - ・受け入れ団体への隊員募集支援あり
- ※令和6年度より上限額変更

## 総務省の目的

- ・都市部から地方への人材流入
- ・地域協力活動による活性化
- ・任期後の定住、定着促進

※参考/令和4年度地域おこし協力隊の隊員数等について(総務省)

## 南阿蘇村 地域おこし協力隊 ヒトコト録

発行人 藤岡政人、大内佑介、桑原健一、市村孝広、田上由菜、槌田晴菜、家入明日美、豊留静香、宮脇悠、吉田千芳子、吉田洋樹、赤星静香、ヴィルヘルム・ヨハネス、梅田ゆうか、江藤俊希、黒崎以朗、大塚史也、御木徳大、萩野雅人、板楠知沙、盛山裕史、阿南望、中山勇治、田中恒幸、中牟田朋宗

発行日 2024年3月

取材・文・編集 家入明日美、田上由菜、板楠知沙

撮影・写真提供 みんな

企画・発行 南阿蘇村地域おこし協力隊  
南阿蘇村河陽1705-1  
TEL.0967-67-2705

印刷 株式会社城野印刷所

※掲載記事、写真等の無断転載はNGですが、記事の一部を個人のSNS等に掲載いただく分にはOKです!

南阿蘇村では熊本地震後の2017年から地域おこし協力隊制度の活用を始めました。2024年2月現在までに43名の隊員を採用、現役隊員は20名で、さまざまな地域課題解決に向けたプロジェクトに従事してもらっています。

私が村の政策の基本とするのは、3つの「K」。すなわち、「暮らし」「環境」「活力」です。地域おこし協力隊の皆さんにも、自分たちが3つのKに携わっているという自覚と誇りを持って活動してほしいと願っています。村外から移住された皆さんにとっては、地域になじめるのか、自分の将来をどうするのかと、不安も多いことでしょう。まず私からお願ひしたいことは、村

最初からすべてがうまくいくわけではありません。時間がかかるかもしれませんが、焦らずにこの村を知ることから始めてほしい。そして「南阿蘇村をよりのよい村へ」という意識を大切に、任期後も地域の一員として存分に力を発揮していただきたい。それは南阿蘇村にとって、大きな希望ともなりえるのです。皆さんの頑張り、村の人たちにも伝わることでしょ。地域活性化への尽力に、心から期待いたします。



南阿蘇村長  
吉良 清一 氏

地域の一人として、  
村の活性化への  
貢献を期待。